

# おかげさま

## ■ 楽曲データ

歌詞：中野八重子 作詞

楽曲：双葉あきら 作曲（藤林由里 編曲）

発表：仏教音楽研究所 1985年

初演：—

初出：『佛教音楽』第11号 仏教音楽研究所 1985年

管理番号：M1577

## ■ 創作の経緯

仏教音楽研究所による作曲募集（第5回、1983〔昭和58〕年）の入選作品。《もろてあわせて》《ごおんうれしや》とともに「演歌三部作」として発表。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『佛教音楽』第11号 仏教音楽研究所 1985年

比較資料：—

校訂の詳細：底資料（オルガン伴奏版）をもとに、ピアノ伴奏版へ編曲。

## ■ 解説

「歌は世につれ……」とありますが、仏教讃歌も、おみのりを伝えるという役割こそ一貫しているものの、時代の流行とともに、その姿は移り変わってきました。音楽のスタイルだけでも、唱歌風・歌曲風・ポップス風など、多岐にわたります。《おかげさま》は、そのなかでも珍しい演歌調の仏教讃歌です。

## ◆ 曲について

1983（昭和58）年、仏教音楽研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室）は、「はじめての『演歌』調仏教讃歌」として、新しい讃歌を3曲発表しました。いずれも公募によるもので、そのうち1曲が《おかげさま》です。

作詞は中野八重子さん（経歴等、詳細不明）。作曲は、群馬県在住の作曲家・双葉あきらさんです。残る2曲は、《もろてあわせて》（詞・成瀬左千夫 曲・和気健康）と、御堂演奏会でおなじみの《ごおんうれしや》（詞・浅原才市 曲・飯田一実）です。いずれも「演歌三部作」として、みなさんのレパートリーに加えていただきたい作品です。

## ◆ 内容について

曲名にもなっている「おかげさま」——自分が受けたご恩に対して、感謝を表す言葉です。しかし、良くも悪くも個人の自立が求められる昨今では、ともすれば形式的に口にしてしまうことも多いかもしれません。それに比べ、ここで歌われる「おかげさま」は、「ありがとう」と対になり、とても素直に響きます。

以前、仏教婦人会総連盟の機関誌『めぐみ』の「法話」欄で、釈徹宗さんが老いや死の問題に絡めて、仏さまにすべてを「おまかせする道」について書いておられました。この仏教讃歌が描くのは、まさに同じ道を行く人の姿なのではないでしょうか。歌詞の最後のくだりからは、頭（こうべ）を垂れ、手を合わせる作詞者の姿が目に見えそうです。さらに、作詞者の気持ちは親鸞聖人が説かれたこの「道」を「子や孫に」伝えたい、という願いへと向かっていきます。その広がりを感じながら、歌っていただきたいものです。

#### ◆演奏のヒント

- ①「演歌調」なので、こぶしをまわしたり、地声を使ったり、自分なりの節回しを楽しんでください。ただ、大人数での斉唱や合唱のときには、加減が必要かもしれません。
- ②低い音域から歌いはじめた後、12小節目でぐっと音域が上がります。演歌らしく歌いたい場合は、ここで裏声や細い声にならないように気をつけて、しっかり声をだしてみましょう。また、12小節目のソーシード#ーレード#の音程をうまくまとめましょう。
- ③13小節目からは晴れ晴れと。14小節目は、シから下降するソの音のピッチが定まりにくいので、注意してください。
- ④最後のくだりは、再び低い音域からはじまります。冒頭と同じように、声の出し方を工夫しましょう。「おかげさま」「ありがとう」という、曲の中心になる言葉を大事に歌ってください。

解説執筆：山口篤子（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No.91（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第218号収録）を加筆・修正の上、転載。